

第 26 回 カダフィ政権下の駐リビア大使へ

2013 年 08 月 20 日

(約 5600 字)

塩尻 宏

《地中海岸の町トリポリ》

2003 年 5 月 9 日に駐リビア大使に発令され、東京での挨拶回りや外務省内の関係部局からの説明を受ける合間を縫って、トリポリへの赴任準備に追われました。1967 年に外務省に入って以来、数年おきに職場を異動しました。記憶をたどると、所属部署の異動は今回で 17 回目となり、そのうち、東京と外国又は外国から外国へと居住地が変わる引越しは 12 回経験しました。在ドバイ総領事から駐リビア大使への異動の際は、手続きの関係もあって、一度日本に引き揚げてから 1 ヶ月余りしてリビアに出発しましたので、短期間に 2 回の引越しをしたことになります。

1992 年 3 月から続いている国連制裁によりリビアへの外国航空機の乗り入れが禁止されていましたが、私が赴任した頃のリビアは、一部の外国航空会社がトリポリへの運行を再開していました。対リビア国連制裁は 7 年後の 1999 年 4 月に執行が停止されましたが、私の前任者の時代には、未だリビアへの国際航空便が運行されておらず、隣のチュニジア国内のリビア国境に近い保養地ジェルバ島にある国際空港を利用して、そこからトリポリとの間は陸路で往復していました。

リビアは地中海に面するアフリカ大陸北部の中央部に位置し、その面積は日本の約 4.6 倍(176 万平方キロ)ですが、95%は砂漠です。総人口 6 百万人ほど(2003 年 554 万人、2013 年 653 万人:IMF 推定)の殆どは、僅かな降雨に恵まれる地中海岸沿いに集中して住んでいます。また、地中海岸沿いにセブラータ(Sebrata)、レプティス・マグナ(Leptis Magna)、キレーネ(Cirene)の古代ローマ都市遺跡、南の砂漠にあるアカクス(Acacus)山地の原始時代岩絵群、西方の砂漠にある中世の隊商都市ガダーメス(Ghadames)の 5 つの世界遺産を有するリビアは、豊かな歴史遺産を持つ国でもあります。

海岸地帯にある首都トリポリや第 2 の都市ベンガジなどは、基本的にはギリシャのアテネやイタリアのローマなどと同じく地中海性気候です。トリポリの気候は、12 月から 2 月頃にかけての冬場は地中海も荒れ氣味で時おりみぞれ混ざりの雨も降る肌寒い曇天が続きますが、5 月から 9 月頃にかけての夏場は快晴が続き、昼間 30°C を越える日もありますが、陽が沈むと気温は下がり快適な気候となります。そのため、トリポリ郊外では乾燥に強いオリーブやブドウなどの果物、柑橘類などの農園が見られます。私の前任地であったドバイと比較しても、トリポリの自然環境は悪くはないと思いました。表面的には、ヨーロッパの地中海岸にあるひなびた地方都市のように感じました。



写真1. 標語は「9月革命は沈まない太陽」(2006年12月7日、トリポリにて筆者撮影)

2003年6月15日に成田を出発して、フランクフルト経由で翌16日にトリポリに到着しました。トリポリ国際空港に降り立って、リビア側の儀典担当官と在リビア日本大使館員の出迎えを受けました。空港から市内に向かう途中には、まばらに見える数階建ての建物の間に「あなただけに敬愛と忠誠を!」、「(1969年)9月革命は沈まない太陽!」などの標語が付されたカダフィの巨大な肖像画が目に付きました。

30分ほどで地中海に面した市街区に入ると、中心部には10数階建てのビルも幾つかはありましたが、その他は2~3階の建物が殆どでした。澄み切った青空に煤けたような町並みは、何となく30年ほど前に勤務したスーダンの首都ハルツームを少しだけ近代化したような佇まいにも感じました。

《リビアの社会環境》

しかし、実際にリビアに住んでみると、その社会環境は予想していた以上に厳しいものがありました。もともとリビアは、隣国のチュニジアやアルジェリアと同様に良質なワインの産地でしたが、1969年革命後しばらくしてからは厳格な禁酒国となりました。さらに、長期にわたる国連制裁によって外国企業との関係が断絶して、上下水道、電気、電信・電話などの社会インフラの保守・整備が停滞したままでした。また、カダフィが唱えた特異な政治理念に国民が追いつくことができず、責任体制が明確でないために行政機構の事務処理能力は極端に低下していました。

カダフィ政権崩壊後の現在でも目立った改善は見られていないようですが、当時リビアを訪問する外国人は、入国査証の申請に先立ってリビア関係機関からの本人が居住する国のリビア公館(当時は人民事務所)に招聘状が届くよう手配する必要がありました。運良く招聘状が届いて査証申請が受け付けられても、実際に査証が発給されるまでには順調にいっても数ヶ月を要しました。外交官の場合には、治安機関の審査が特に念入りに行われるためか、1年近く経っても回答がないことは珍し

くなく、赴任をあきらめた例もありました。そのため、当時のリビアは世界中で最も訪問し難い国の一とと言われていました。

さらに、着任後に私が大使館員から受けた説明では、未だカダフィ政権と欧米諸国との緊張関係が続いており、リビア官憲の外国人に対する猜疑心は強く、一般市民も外国人との接触を控える風潮が浸透しているとのことでした。リビアで不都合な事件が起きると、政権側からは米国の CIA やイスラエルのモサドなどの諜報機関の仕業と吹聴されるのが通例でした。カダフィ自身も演説の機会には「外国人を見たら泥棒かスパイと思え」と言って、国民に対して警戒を呼びかけていた時期でもありました。

また、米英との関係が極度に悪化した 1980 年代以降のリビアでは英語教育が禁止されたこと也有って、当時は街中の看板や道路標識などは全てアラビア語のみで、一般市民の間でも英語は殆ど通じませんでした。アラビア語のみの国営テレビ・ラジオ放送も当局が意図的に流す番組のみで、外国人が暮らすには様々な制約や障害を感じられました。今年 3 月にリビア側の招待で、5 年ぶりにカダフィ政権崩壊後初めて訪問したトリポリでは、稀に英語表記が混じった看板も見られるようになっていました。リビア社会の変化の兆しかもしれません。

なお、当時のリビアの社会や政治状況についてご关心のある方は、塩尻和子著『リビアを知るための 60 章』(2996 年 8 月、明石書店)、ごく最近のリビア事情については、本年 4 月に「Asahi 中東マガジン」中東リポートに掲載された拙稿「新生リビア見聞記」(1~3)をご参照願います。

《カダフィは国家元首ではない?》

特命全権大使が赴任する際には、派遣国の元首から相手国の元首に宛てた信任状を携行します。リビアでは当時からカダフィが実質的な最高権力者でしたが、私の信任状は天皇陛下から当時のゼナーティ全国人民会議書記(Mr. Mohammad al-Zenati, Secretary, General People's Conference)宛てのものでした。

1969 年 9 月の革命によりリビア王国(Kingdom of Libya)からリビア・アラブ共和国(Libyan Arab Republic)となったリビアは、1977 年 3 月に「リビア・アラブ人民社会主義ジャマヒリーサ(Socialist People's Libyan Arab Jamahiriya)」という特異な政治体制に移行しました。「ジャマヒリーサ」とは、国家元首も議会も政府も存在せず、決定機関である人民会議(People's Conference)と執行機関である人民委員会(People's Committee)を通じて人民自身が統治する直接民主主義体制であると説明されていました。それ以来、カダフィは全ての公職から離脱すると宣言して自らを「9 月革命指導者(Leader of the September Revolution)」と名乗り、もはや国家元首ではないと公言していました。リビアの政治体制の変遷については後述します。

そのため、手続き上は派遣国の元首から相手国の元首あてに出される信任状のあて名について、リビアでは誰にすれば良いのかが判然としないまま、その都度、リ

ビア側の担当者と協議していたようです。多くの国の大使は私と同様に、それぞれの国家元首から全国人民會議書記宛ての信任状を奉呈したようでしたが、中には外務大臣相当職の対外連絡・国際協力担当全国人民委員会書記(Secretary, General People's Committee for Foreign Liaison and International Cooperation)宛てとした大使もいたと聞きました。

着任後しばらく様子を見ていましたが、国家元首ではなくて指導者だと名乗りながらも、リビアを代表してアフリカ諸国などから来訪する大統領と首脳会談を行い、アラブ首脳会議、アフリカ首脳会議などに出席していたカダフィの様子に腑に落ちないものを感じた私は、懇意になった当時の英國大使に社交の席で「あなたの信任状の宛て先は誰だったのか?」と尋ねてみました。彼の答えは「女王陛下の大天使の信任状は、相手国の最高首脳に宛てられるべきである。私の信任状もカダフィ指導者宛てであった。その信任状をカダフィの代理としてゼナーティ全国人民會議書記に奉呈したが、特に問題もなく接受された」とのことでした。

私の信任状奉呈式は、着任してから約1ヶ月後の2003年7月14日に行われました。当日、私はリビア側から出迎えの乗用車で2名の日本大使館員と共にトリポリ市内の迎賓館に赴き、両国の友好関係の益々の増進を祈念するとの天皇陛下からご伝言と共にゼナーティ書記に信任状を奉呈しました。式典後には、同席していた数名のリビア側要人も加わって、極めて和やかで友好的な雰囲気で歓談が行われました。その時に知遇を得たリビア要人の幾人かとは、その後個人的にも親交を深め、私のリビア在勤中に様々な好意的対応を受けました。

《公邸料理人の活躍》

2013年8月現在の外務省資料によれば、特命全権大使が駐在する日本の在外公館(日本国大使館及び国際機関の日本代表部)は150以上あります。そのうち、米、英、フランス、ロシア、中国などの主要国にある日本大使館及び国連本部があるニューヨークの日本代表部などの重要公館には50~60名から100名近くの外交官が駐在しています。次いで、中東・アフリカ地域で言えばエジプト、サウジアラビア、トルコなどの中規模公館では、20~30名の外交官が配置されています。圧倒的多数を占めるその他の大使館は10名前後またはそれ以下の人数の外交官しかいない小規模公館です。

私が駐在していた頃の在リビア日本国大使館は、特命全権大使の下に8名の日本人職員(外交官7、館務を補佐する派遣員1)と現地スタッフ10数名が勤務する典型的な小規模公館でした。館員の構成はベテランの次席(参事官)と医務官以外は比較的若手の書記官で、私以外にアラビア語ができるのは若手の書記官1名だけでした。リビア当局者の中には英語を話す人もいましたが、一般市民の間では英語は殆ど通じませんでした。また、今年3月にリビア側の招待で、5年ぶりにカダフィ政権崩壊後初めて訪問したトリポリでは、稀に英語表記が混じった看板も見られるよう

になっていましたが、当時は街中の看板や道路標識などは全てアラビア語のみでした。

リビアではタイ人の公邸料理人を夫婦で雇うことになりました。彼はバンコクにある老舗の日本料理店で会席料理と寿司を専門とするベテランの料理人でした。北アフリカの片隅で限られた食材を工夫しながら提供してくれる彼らの料理に私は公私共に大いに助けられました。彼ら夫婦は温厚・誠実な性格で、各国外交官や日本人来訪者を招いての食事会、300人以上も招待しての大規模な天皇誕生日レセプションなどの料理手配を手際良くこなし、料理の内容も極めて好評でした。私が時おり各国大使夫妻を招いて行った夕食会では、バンコクで寿司カウンターのチーフを務めていた彼が、限られた種類のネタを使って目の前で本格的な握り寿司を提供して大いに喜ばれたりもしました。この寿司パーティは外交団の間で評判となり催促を受けるほどでした。この料理人の貢献振りに感銘を受けた私は、2006年年の退官直後に公邸料理人表彰制度の対象者に推薦しました(彼は翌2007年1月に優秀公邸料理人の1人として当時の麻生外務大臣から表彰されました)。



写真2. 塩尻がリビア在任中の公邸料理人の表彰状(2007年1月20日)

在外公館の規模の大小にかかわらず、館員たちが心身共に健全な状態でそれぞれの職務を果たせる環境を維持することは公館長としての務めです。特に、瘴癪地と言われる気候・風土が過酷な発展途上国にある小規模公館では、自然環境や社会環境よりもむしろ館内の人間関係(人的環境)が館員の士気に大きな影響を与えます。当時の在リビア大使館には、家族同伴者のみならず、単身赴任者や独身者もいましたし、また、初めて中東・アラブ世界に勤務する者やそもそも外国勤務は初めてという者もいました。そのような彼らにとって、アラビア語しか通じない異文化社会のリビアでの在勤は、日常業務だけでなく生活上も苦労が多かったと思います。

最年長者でもあった私は、大使公邸で館員家族を私的な食事会に招いて歓談の機会を設けたりして、プライバシーには立ち入らないよう配慮しながら館員の日常生活

活の様子に目配りしていました。また、休館日には私自身が上記の公邸料理人と共に現地の魚市場に出かけて買って来た魚を生干しにして配ったり、韓国人が経営する農場に出向いて入手した白菜や大根などの野菜を配ったりしたこともありました。もちろん、大使公邸での私的な食事会の費用や館員に配った魚代や野菜代は全て私のポケットマネーでした。

《親密な外交団》

当時のリビア当局者の中には英語を話す人も散見されましたが、先方とやり取りする文書は全てアラビア語でした。リビア側からの文書はアラビア語ができる現地スタッフが英語に翻訳してから担当館員に回付して処理し、こちらから発出する文書は担当館員が作成した英文の素案を基に現地スタッフがアラビア語の文書案を作成し、私が加筆修正して発出するのが通例でした。まさに特命全権大使による手作りの仕事でした。私の前任大使もアラビストでしたが、彼の苦労が偲ばれました。

余談ですが、そのような勤務環境にあつたリビアでの私の後任の大使は、中東にもアラビア語にも全く縁のない朝鮮語の専門家でした。彼の駐リビア大使への異動は、たまたま人繰りの都合だったようですが、外務省人事当局者の真意を計りかねました。

さて、「外国人を見たら泥棒かスパイと思え」という雰囲気であった当時のリビアでは、一般市民が外国人と交際することは差し控えられ、ましてや外国の外交官と気安く話すことははばかられていました。各国大使館で行われるナショナルデー・レセプションにはリビア当局の関係者も少なからずの招待状が送られますが、出席するのはほんの数名でした。私が着任後しばらくして知り合いになつたリビア当局の若手職員に、その点について非公式な会話の席で尋ねてみたところ、「リビア外務省に相当する対外連絡・国際協力担当全国人民委員会の関係者といえども、外国大使館の行事に出席する場合には事前に上司の許可を得る必要があるが、外国との接触に積極的であると憶測されるのを懸念して許可を求める者は少なく、仮に許可を申請しても当日までに得られることは殆んどないのが実情だ」と囁いてくれたことがありました。

当時のリビアの政治・経済動向は、同国の国営報道機関の報道だけに頼っていては把握できませんでしたので、BBC やアルジャジーラなどの衛星放送テレビに注目すると共に親しくなつた各国大使との情報交換が不可欠でした。当時のトリポリには約 60 力國の大使館があり、その多くはアフリカ諸国でしたが、米国以外の殆どの主要国の大使館もありました。着任後早々から時間を見つけては精力的に各国大使への表敬訪問を始めた私は、数か月後には殆ど全ての大使と面識を得ることができました。

リビア人関係者との接触が容易ではないために、各国大使はお互いに協力して情勢把握に努めていました。これと言った娯楽施設もないトリポリでは、欧州、EU、アジア、アフリカ、アラブなどそれぞれのグループ内で持ち回りの食事会や意見交換会を

行うなど、外交団の同士の非公式な交流も活発でした。欧洲諸国の大使の中には私と同様に幾人かのアラビストもいて、お互いに格別な親近感を持って交流したことは特に懐かしく思い出します。

(続く)

リビア

ASAHI 中東マガジン



アラビスト外交官の39年

第 27 回 カダフィの挑戦と挫折

2013 年 09 月 03 日